

佐藤一伯著

『明治聖徳論の研究——明治神宮の神学——』

藤田大誠

現在、御嶽山御嶽神明社禰宜、國學院大學研究開発推進機構共同研究員の著者は、長年明治神宮の神職として神明奉仕の傍ら、國學院大學大学院にも社会人入学して調査・研究を地道に積み重ねて来られた。その成果である本書は、平成十八年九月、著者が國學院大學に提出した博士学位申請論文「明治聖徳論の形成と展開——明治神宮創建の神学的研究——」に加筆修正を施して公開したものである。

はじめに、本書の構成を示しておかう。

序章 明治聖徳論研究の課題と展望——明治神宮創建の神学的理解に向けて——

第一部 明治聖徳論の形成

第一章 明治天皇「聖徳録」の誕生

第二章 昭憲皇太后行啓記録と「坤徳録」

第三章 明治後期の天皇・皇后像

第四章 明治天皇崩御と明治聖徳論の形成

第五章 昭憲皇太后崩御と明治聖徳論の形成

第二部 明治神宮創建と明治聖徳論の展開

第六章 明治神宮創建論の形成と展開

第七章 明治神宮造営と明治聖徳論の展開

第八章 明治神宮内外苑の創建と阪谷芳郎

第九章 昭和期の明治天皇論——渡辺幾治郎・木村毅

を中心にして——

第十章 近代の神道・日本研究と明治天皇論——加藤

玄智を中心に——

終章 研究の成果

補論 明治天皇・昭憲皇太后の御肖像

著者は、「本研究は神道学（神道神学）の素材とくに祭神および崇敬者の特色を考察する「神社史の研究」として、および祭神（明治天皇・昭憲皇太后）への人々の意識（信仰や信頼）が、明治神宮創建にどのように影響したのかについて、明らかにすることを目的とした。その際、近代の日本人が明治天皇・昭憲皇太后の「聖徳」・「坤徳」をいかなるものと理解し、または論じ、ひいては明治神宮の創建・奉賛活動にどのように反映・展開したのかを、やや詳細に分析することが不可欠であるとの問題意識を持った。そして近代日本では、天皇・皇后の「徳」の意味で「聖徳」という言葉を用いる例が多く確認されるため、明治天皇・昭憲皇太后

の「聖徳」に関する人々の著述や意見を、「明治聖徳論」と総称し、その実態と形成および歴史の変遷、さらには明治神宮創建との関係を、思想史の手法も採り入れながら考察することにした。」(三六〇頁)と述べてゐる。

かかる問題意識のもと、序章では、「予備的考察」として、「神道学(神道神学)の方法と明治神宮に関する研究状況」を確認し、戦後の明治天皇及び昭憲皇太后に関する研究の問題点と明治聖徳論研究の意義と課題を提示してゐる。とりわけ著者は、「戦前から受け継がれた成果のうち、戦後の研究で見過されてきた点をいま一度確認することから出発」し、現代の人々が「一級資料」をもとに掌握してゐる歴史学的成果ではなく、「当時の日本人の明治天皇像・昭憲皇太后像を解明することが、最も重要な課題」だといふ(三六一頁)。具体的には、例へば加藤玄智編『明治・大正・昭和 神道書籍目録』(明治神宮社務所、昭和二十八年)で示された膨大な書籍群の中にあるやうな「大衆文化としての新聞・雑誌・出版物、明治神宮創建時における多様な人々の動向・思想、そして奉賛活動、参詣者の現象など、広範にみられる明治聖徳論を思想的に考察することが不可欠である。」とする(二六頁)。これは、かつて岩井忠熊『明治天皇―「大帝」伝説―』(三省堂、平成八年)が「明治天皇に関する史料はまだ十分に公開されたとはいえない。

これまで広くおこなわれてきた伝記にも、不確実な二次史料によつたものがある。」と記し、また、「近代の天皇についての学問的研究は飛鳥井雅道氏の『明治大帝』(一九八九)ぐらいであり、他の伝記はほとんど敬仰・謹解の立場で書かれたものだ。」と批判した如き状況を反省する形で取り組まれてきた日本近代史による明治天皇研究の方向性とは逆の(発想の転換)に他ならない。著者は明言してゐないが、本書の方法は、いはば「明治天皇像」「昭憲皇太后像」をめぐる(メディア史研究)であるといへよう。

斯様な研究手法の本書は、二部構成を採り、ほぼ時系列的に論考が配置されてゐる。「第一部 明治聖徳論の形成」では、明治期から昭和戦前期にかけて著された明治天皇・昭憲皇太后に関する著作や新聞・雑誌記事などの内容を手掛かりに、「明治聖徳論」の特色及びその形成過程について考察し、「第二部 明治神宮創建と明治聖徳論の展開」では、第一部で把握した「明治聖徳論」と明治神宮創建との関連性、大正・昭和戦前期における学術の進展による新たな「明治聖徳論」について検討してゐる。つまり本書は、一貫して近代日本を生きた「国民」の明治天皇・昭憲皇太后に対する(眼差し)を対象とする研究であるといへよう。本書の成果は、終章で著者自らが明解に整理してゐる。それを踏まへ、著者が示す四つの成果を要約しておく。

第一に、「明治聖徳論の形成と展開」について明治初年から説き起こしてその変遷を辿り、地方巡幸の行はれた明治十年前後から、天皇の「聖徳」に関する記述がマスメディアや自治体の公的な文章などに出始め、明治二十年代以降に天皇・皇后の政務への精励や仁慈の御心（聖徳）を集録した出版物として「聖徳録」が登場して来ることを指摘したことである。さらに明治二十年代から三十年代にかけて、「国民」は天皇の「精神」や「苦悩」といふ御日常の目に見えない所に関心を持ち、道徳上の道標として受け止めるとともに、皇后も天皇の御内助や「仁慈」を宿す女子・妻・母の「鑑」として道徳的尊敬を集めてゐたことも明らかにしてゐる。つまり、新渡戸稲造のいふ「道徳上の教師」としての尊敬の念は、民間から湧出されてくるのである。

第二に、近代の天皇・皇后像は、日露戦争以降、修身教科書などでも採用され、「只管に精励される天皇」「仁慈あふれる皇后」としてのイメージがさらに浸透するが、当該時期には、「聖徳録」の量産に加へ、御歌所長の高崎正風による御製・御歌の「漏洩」及び謹解の取り組みなどが影響を与へたことを指摘したことである。また、天皇・皇后の修養・精励・勤儉・仁慈を尊ぶ姿勢からは、「天皇の現人神としての宗教的権威」（村上重良）といふ観念よりも、

むしろ近世以降の「通俗道徳」の実践を尊ぶ民衆意識との連続性が窺へることを著者は強調する。さらに明治天皇・昭憲皇太后の崩御を契機として、「明治聖徳論」（天皇・皇后の「徳」を顕彰し国民の「亀鑑」とする意識）は、近代国民国家建設を成し遂げた「鴻業」への称賛と明治時代終焉の哀愁の念を複合させて拡大し、「明治の雄大にして快活な気宇」を「記念」する明治神宮創建運動や昭和二年の明治節制定運動を根柢から支へる精神になつたと指摘する。

第三に、大正元年八月に発生する「明治神宮創建論」を分析する中で、天皇と明治時代の偉大さを表象する雄大な森、天皇の「質素」「儉徳」に因む質朴な檜素木造の社殿など、今日に受け継がれる境内の佇まひや「風致」に当時の「明治聖徳論」が反映してゐると指摘したことである。また、明治神宮宝物殿や聖徳記念絵画館などの「国民教化」施設構想、国民の「真心」「至誠」の発揚をして祭神の「聖徳」の顕現と捉へられた献木や青年団奉仕、創建後の多彩な「国民文化」（内苑の初詣、結婚式、神楽奉納、外苑の体育大会など）の普及・創造などの「明治聖徳論」の新たな展開も見られたと論じてゐる。ただ、明治神宮奉賛会理事長阪谷芳郎の持論である、明治神宮は「国体無言ノ教育」の場といふ考へが基本にあり、内外苑の「風致」は「明治聖徳」（雄大・質実・仁慈）の重要な表象であるといふ

当初の理念を堅持する姿勢が一貫してゐたとされる。

第四に、学問上においては、渡辺幾治郎や木村毅らの明治文化研究会、加藤玄智ら明治聖徳記念学会などの神道・日本研究において、「明治聖徳論」へのアプローチが試みられたことを指摘したことである。具体的には、渡辺による教育勅語に関する自由な歴史討究、木村による「民衆の景仰の最大公約数」としての「明治聖徳論」、加藤による「文明教（倫理的智的宗教）」としての「生祠信仰」「神皇信仰」の視点を介した国体論・神道論が紹介されてゐる。

そして末尾の補論「明治天皇・昭憲皇太后の御肖像」は、明治神宮所蔵資料を中心に、御写真、錦絵、石版画、彫刻等の制作過程とその特色を考察し、「御姿を伝える数少ない情報を頼りに謹製され後世に残されてきた数多の御尊影・御尊像は、近代日本の幾多未曾有の困難を国民とともに越え歩まれた明治天皇・昭憲皇太后の聖徳を景仰する、人々の真心の結晶」（四〇四頁）であつたと論じてゐる。

本書は、多岐に亙る先行業績を踏まへた的確な研究史整理を行った上で、明治天皇・昭憲皇太后を対象とするメディア資料をはじめ、公文書や明治神宮所蔵資料なども含めた膨大な資料の蒐集と丹念な検討作業に基づく、斬新な明治神宮祭神論・明治神宮史研究であり、鎌田純一のいふ「天皇奉祀神社」研究の進展に寄与する労作といへよう。

ただ、著者は、安蘇谷正彦や岩本徳一の神道神学理解に「即し、「特定の人間の提唱に偏らない、国民的支持と共感を基盤とした明治神宮祭神論の研究が深められ、その成果がひいては神道学ことに神学的研究の進展にいささかでも貢献できるよう努めた」といふ（三八四頁）。しかし、神道神学研究全体（例へば上田賢治や中野裕三らの研究なども含めて）の中でどのやうに自らの研究を位置付けたかつたのかについては言及が無いため、やや食ひ足りなさが残る。それ故、神道神学研究における本書の位置付けについては未だ留保をせざるを得ず、著者の今後の研究に期待したいところである。この点について評者は、すでに『神社新報』第三〇七一号（平成二十三年五月二十三日付）における本書の書評でも指摘したため、これ以上は触れない。

また、近年、様々なアクターの闘ぎ合ひの中から形成されて来る、社殿建築や「鎮守の森」造成に関はる単線的で無い構想の変遷、即ち建築史や造園史の観点を存分に踏まへた明治神宮史研究が、青井哲人や畔上直樹によつて提示されてゐる（明治神宮鎮座九十年記念公開学術シンポジウム「明治神宮造営をめぐる人々」近代神社における環境形成の問題点——『神園』第五号、平成二十三年）。かかる最新の研究成果と本書の如き「明治聖徳論」研究との整合性や統合的理解を如何に図つていくか、といふ点だが、これからの明治神宮

史研究の重要課題になるものと思はれる。

実は、本書では「明治聖徳論」内部における〈相剋〉といふ面は余り窺へなかつた。しかし、多種多様なアクター（各々が「明治神宮神学」の担ひ手足り得るであらう）が関与した明治神宮造営においては、具体的な構想の場面で実際に様々な齟齬や路線の違いが見られたことから、やはり「明治聖徳論」といふ大きな網を設定するならば、諸説を止めた最大公約数的理解となる「明治聖徳論」へと至るプロセスは一体どう推移したのか、といふやや複雑な研究手続きも今後は必要となってくるのではなからうか。

評者は本書を拝読して、「明治神宮の神学」とは、到底「一社」或は「神社神道」の神学といふ意味での「神道神学」に留まらない性格のものであると感じられた。つまり、「国民による国民のための神社！」としての明治神宮の創建プロセスを具に描いた山口輝臣『明治神宮の出現』（吉川弘文館、平成十七年）の響に倣へば、明治天皇・昭憲皇太后といふ「明治」を象徴する祭神Ⅱ（時代精神）の旗の下に集ふ「国民の国民による国民のための神学」、いはば「国民」全体を担ひ手とする神学に他ならないのではないかといふ印象を受けたのである。そこで、一つの疑問が生じる。国学系歴史学者である萩野由之、三上参次、萩野仲三郎、宮地直一らはある程度の関与があつたものの、明

治神宮造営における一般神社神職の「疎外」（山口輝臣「神社奉祀調査会について（上）」明治神宮計画における「由緒」と「風致」——『海南史学』三九、平成十三年）といふ現象、つまり神職たちが中心的な「明治神宮神学の担ひ手」足り得なかつたことは、どのやうに理解すべきなのだらうか。

ともあれ、本書は「近代天皇・皇后像」研究、明治神宮史研究に一石を投じた画期的研究といへる。今後、明治神宮史に関心を持つ研究者たちが本書を踏まへることによつて、飛躍的な研究進展が齎されることになるであらう。

※本稿は、第三回神社と「公共空間」研究会・第七回明治神宮史研究会（平成二十二年十二月二十五日、於國學院大學）として開催された本書の書評会における発表原稿をもとに作成したものである。また本稿は、平成二十三年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「帝都東京における神社境内と「公共空間」に関する基礎的研究」（研究課題番号・二三五二〇〇六三、研究代表者・藤田大誠）における研究成果の一部である。

（国書刊行会、平成二十二年十一月、A5判、四一五頁、本体七六〇〇円）

（國學院大學人間開発学部准教授）